

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第 66 号

● Contents ●

Topic: The next stage of the Association for Northeast Asian Studies. (OKA Hiroki)	1
Northeast Asian Reports: The elites in Beijing: Daily landscape of the Qing Dynasty. (Hai Sechengoa)	2-3
Members' Forum: On the puppet state of Manchukuo. (YAMADA Katsuyoshi)	4



東北アジア学術交流懇話会の 発展にむけて

東北アジア学術交流懇話会 理事長
東北大学 東北アジア研究センター長
岡 洋樹



東北アジア学術交流懇話会は、東北大学東北アジア研究センターの研究活動とその成果を市民の皆様にお知らせし、東北アジア地域のさまざまな課題をともに分かち合う会として設立されたものです。東北アジア研究センターは、本年20年目を迎えることになりました。これもひとえに会員のみなさまのおかげと存じております。

さて本年5月に開催されました本会総会におきまして、会の規定を改め、これまで一口5千円いただいていた会費を1千円とすることにいたしました。これにより、会の活動をより東北アジア研究センターと密接なものとしてゆくとともに、より広く市民の皆様にご参加いただけるようにしてまいりたいと考えております。

本会ニューズレター「うしとら」は、わたしどものセンターや、会員のみなさまの活動の様子をお伝えする場として年四回刊行しております。これまでは紙媒体でお届けしてまいりましたが、インターネットが整備された今日、ホームページ上でみなさまにお届けすることで、よりかんたんにご覧いただけるようにいたします。

また本会ホームページでも、東北アジアについてのいっそう充実した情報をお届けしたいと考えています。ホームページでは、東北アジアの歴史、環境、文化について、画

像をまじえてご紹介していますが、今後さらにコンテンツを充実していきたいと思っております。また従来通り、東北アジア研究センターが企画・開催する公開講演会やシンポジウムのご案内もしてまいります。本年12月5～6日には、センター20周年記念企画といたしまして、記念講演会とシンポジウムを仙台市内の国際センターで開催いたします。記念講演会では、京都大学人文科学研究所の山室信一先生による「思想課題としての東北アジア」、国立科学博物館の篠田謙一先生から「DNAから見た日本人の形成と北東アジア」という二つの講演を予定しております。文系・理系の立場から、東北アジアを考える機会になればと存じます。

ご承知のとおり近年、東北アジアではさまざまな問題が噴出しており、わが国でも注目を集める地域となっています。しかしそれはかつての冷戦とはまったく異なり、対立面と協調の面が錯綜した、複雑な様相を呈しています。わたしたちは政治・経済ばかりでなく、環境や文化といったさまざまな課題を知ることを通じて、東北アジアの安定に寄与してまいりたいと考えています。

今後とも、東北アジア研究センターをよろしくご支援のほど、お願い申し上げます。

東北アジア通信

東北アジア学術交流懇話会 平成27年公開講演会

エリートたちの北京 ～清代の日常風景～

東北大学 東北アジア研究センター 教育研究支援者
(東北アジア言語文化遺産研究ユニット)

ハイ・セチンゴアー

恒例の東北アジア学術交流懇話会の公開講演会が平成27年5月22日(金)に東北大学東京分室で開催された。今回の講演会は「エリートたちの北京～清代の日常風景～」というテーマのもとに、落合守和・首都大学東京客員教授による「満洲族の暮らしとことば」と栗林均・東北大学教授による「清代北京城に暮らした旗人(エリート)たちの日常」と題する2つの講演が行われた。講演会には、学術交流懇話会の会員のほか、一般からの聴講者等約25名が参加した。

講演のテーマである「エリートたちの北京～清代の日常風景～」について、講演会のポスター(写真1)には次のように説明されている:

「時は18世紀清朝の乾隆帝の時代、所は大清帝国の中心地北京城。大清帝国の支配層が居住する北京城で、満洲族

が自らの言葉を学ぶための会話学習書が出版された。対話形式の百篇の話題を集めた、題して『一百条』。そこには、当時の満洲族の日々の暮らしや人間関係に関わる生き生きとした情景が描かれている。講演会では『一百条』のテキストを通して、清朝の支配階層にいた満洲族の暮らしを見る。」

北京の故宫博物館は周囲を高さ10メートルの城壁に囲まれ、内と外を通じるのは東西南北の4つの門だけである。現在、北京の地下鉄環状線(2号線)が走る、ちょうどその真上には、かつてさらに堅固で高い城壁が周囲を巡らし、完全に内と外を隔てていた。九つの城門以外に内外に通じる道はない。城壁に囲まれていた「北京城」である。

清朝時代にこの城壁都市の中に住むことができたのは、「八旗(はっき)」に所属する人たちに限られていた。「八旗」とは、清朝建国時に皇帝の直轄していた軍事集団であり、その旗の色と形によって八つに分けられていた。満洲族の満洲八旗の他に、これに加わったモンゴル族と漢族も同じように蒙古八旗、漢軍八旗として「八旗」に編成されていた。八旗に属する満洲族、モンゴル族、漢族は「旗人(きじん)」と呼ばれ、清朝の支配階層を構成していた。軍事集団である八旗は、「旗人」たちの社会集団でもあった。

講演会のテーマである「エリートたちの北京」は、このような清代の北京城とそこに暮らした「旗人」たちを指している。旗人たちの日常生活が描かれた『一百条』という満洲語の会話学習書と、その内容を題材にして講演が行われた。

最初の講演者、落合守和(おちあい もりかず)首都大学東京人文・社会系客員教授(写真2)は清代における口語中国語と口語満洲語の変遷を研究しながら『一百条』に注目してきた。『一百条』



写真2. 落合守和教授



写真1. 平成27年公開講演会ポスター

東北アジア通信

は対話形式の満洲語で書かれた口語学習書であるが、それに口語中国語や口語モンゴル語の対訳が付された『清文指要』、『初学指南』、『三合語録』等の学習書が編纂され、さらにそれらから『談論篇百章』(1867年)といった中国語の会話学習書へと発展していく。この意味で、『一百条』の成立とその発展は口語満洲語だけでなく口語中国語の研究にとっても重要な資料となっている。

落合教授は、「満洲族の暮らしとことば」と題する講演の中で、『一百条』が編纂された背景として、当時の満洲族の満洲語の能力がいかほどであったろうか、という指摘を行った。『一百条』には、満洲語の個人教授を乞い、あるいは満洲語の学習を勧め、満洲語の学校を探す話がある。また、学んだ満洲語がうまく口をついて出てこないと嘆き、一方満洲語の達人の発音に漢語の音が少しも混じっていないと称賛している。落合教授は、ここに、当時の満洲旗人たちの満洲語をめぐる言語状況が投影されているとみなしている。

落合教授は、また『一百条』の中にみられる満洲族の尚武の伝統について指摘した。『一百条』には、騎馬、弓、槍、剣術といった武術を奨励し、名人の武芸を讃え、武官に昇進した友人を祝す話がでてくる。(満洲語や) 学問で出世する文官と、武芸で出世する武官とが、満洲旗人の目指す所として描かれているのを見ることができる。

落合教授は、清朝時代の暮らしを伝える画図を含む文献資料を持参して、出席者に回覧した。

次の講演者、栗林均(くりばやし ひとし) 東北大学東北アジア研究センター教授(写真3)はモンゴル語学が専門であるが、『一百条』のモンゴル語訳である『初学指南』(1794)の日本語訳(*)を出版したことから『一百条』に関わってきた。『一百条』と『初学指南』は、内容は同じであるが、『初学指南』のモンゴル語は満洲文字で表記されて、当時のモンゴル語の発音を示そうとしている(図)。

栗林教授は、『一百条』に「北京城」の城壁の存在が反映されている話を3つ紹介した。第一は、郊外に墓参に出かけ、一日かけて到着し、墓参の後一泊して翌朝早くに出て夕方城門が閉まるのに



写真3. 栗林均教授

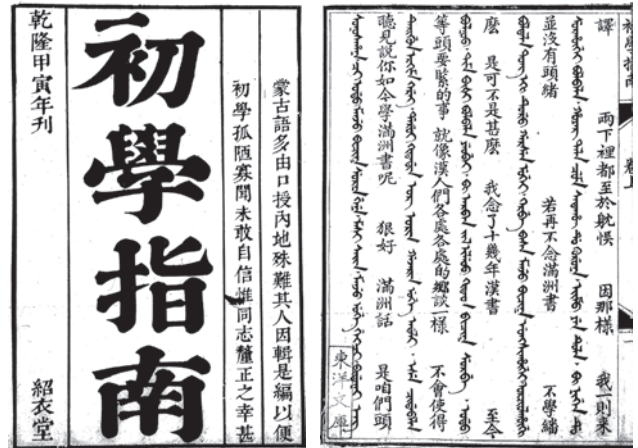


図. 『初学指南』(1794)の表紙と最初のページ。本文は口語の中国語とモンゴル語の対訳。モンゴル語は満洲文字で表記されている。

ようやく間に合ったという話。墓地は城市から遠かったらしい。第二は、城外に遊楽に出て、道に迷ったり、飲み食いしているうちに夕方になり、城の閉門に間に合わず、同行の者が皆城門から閉め出されて、落胆したという話。夜をどうやって過ごしたかは書いてない。第三は、城の外で雨に降られて、城外の知人宅に身を寄せ、厚遇された上に泊まってくよようと勧められる話。人付き合いの大切さを説いたものか。

「北京城」の壮大な城壁は、いつ無くなったのか?これに関する情報は極めて少ないが、栗林教授は、1960年代に毛沢東の命により解放軍の工兵部隊によって粉塵と化した、という陳凱歌(チェン・カイコー)氏の文章(『私の紅衛兵時代ある映画監督の青春』講談社現代新書、1990;2006)を紹介した。

また、『一百条』では、旗人は何もせずとも国から食いぶちをもらって暮らせる身だが、だからこそ儉約と学問に努めるべきだと説いている。同時に、飲酒、暴食、賭博、色事を戒めながら、それらで没落した話がいくつも語られている。栗林教授は、これらも含めて『一百条』の中の話は、当時の旗人の生活を実際に見聞した当事者の経験が具体的に描写されており、清代の北京城における旗人(エリート)たちの日常生活を知る上で極めて興味深い文献であると指摘している。

(*) 栗林均・斯欽巴図『『初学指南』の研究—18世紀の口語モンゴル語—』(東北アジア研究センター叢書第55号、2015年2月)

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです。
 今回は、東北大学名誉教授の山田勝芳先生に戦前の満洲国と工藤忠という人物にまつわるお話をしていただきました。
 東北大学東北アジア研究センターの第3代センター長(2001.4.1～2005.3.31)を務められた山田先生は中国古代の財政・貨幣史から近代史に至るまで中国史を幅広く研究しておられます。

「傀儡国家」満洲国を思う

山田 勝芳



東北アジア研究センター教員生活の最後に工藤忠という人物に出会ってから、東北アジア近代史研究へと舵を切って8年余になり、最近では「工藤忠と満洲国」を考えている。満洲国はわずか13年余りの短い国家であったが、中国史、日本史、ソ連史などが交錯する実に多様で複雑な諸問題があり、容易ではないという感を強くしている。

1931年9月18日の柳條湖(溝)事件後、11月に工藤忠とともに満洲に入った溥儀は1932年3月9日執政就任式に臨むが、その直前まで激動の中に居た。自分を元首として戴くことについて共和制、帝制の意見対立が激しく、彼自身も断固として共和制「大總統」を拒否し、工藤も小川平吉にこの溥儀の意向を電報で伝えた。結局、溥儀も共和制「執政」で妥協し、一年間の試験期間就任とした。しかしその内実は、3月6日湯崗子温泉で関東軍高級参謀板垣征四郎に提示され、溥儀が署名し花押を書きたいいわゆる溥儀・本庄秘密協定(3月10日付)で政治・軍事・人事などの実権を関東軍に委任した如く、まさに傀儡国家そのものだった。この事情については関東軍参謀だった片倉衷のいくつかの文に詳しい。

元首となった溥儀は妻の婉容や家族及び多くの従者がいたので新京(長春)で住む場所が必要であり、旧吉黒樵運局を改修して住んだ。そこには執政の公的な機関である執政府とは別に、溥儀が私的に設置した内廷(司房、膳房など)もあった。工藤はこの執政府でまず侍従武官として勤務したのである。工藤はこの建国初期の資料を僅かだが残している。その一つが「手槍執照」(写真1)である。表面に「侍従武官工藤忠」とあって「執政府警備処之印」を押し、裏面には「手槍執照第002号。普魯司式手槍壹支。手槍号碼第17408号。子彈伍拾粒。執政府警備処填發。填發員。大同元年五月三十一日」とあり、填發員世蔭の「世蔭私印」が押しあてられている(斜印は判読が難しいが、「張海鵬印」か)。侍従武官として工藤は拳銃を50発の弾丸とともに支給されていた。これは工藤忠ご遺族所蔵で近年見出された貴重な資料であり、ここで初めて公開するものである。



写真1.「手槍執照」表面



写真2. 同 裏面

溥儀は1934年3月1日念願の皇帝になった。1932年3月の「政府組織法」第4条では「執政ハ全人民之ヲ推挙ス」(日文)とあったが、1934年3月の「組織法」では第2条に「皇帝ノ尊嚴ハ侵サルコトナシ」(日文)とあっても「全人民」の推挙などはない。それをあけすけに言ったのが片倉衷である。関東防備軍参謀片倉は、1941年9月15日新京日満軍人会館で講演し(国会図書館憲政資料室所蔵「満洲建国の回想」)、「満洲国の皇帝は其天命享受は日本天皇に依存し奉るといふことが第一であります」「どんなに識見が優れても、日本天皇

の思召に叶はぬ以上絶対に満洲国皇帝の御地位は無いといふのが日満間の天道であり」と、帝権授与者は天皇だと明言した。したがって関東軍将校たちが“天皇に直隷した自分たちは皇帝の上位にある”という意識をもっていたとしても不思議ではない。形の上で全人民の支えがあった執政から、全く日本に従属した皇帝へと、その傀儡国家の度合いは根絶的に強まった。そのような中で工藤忠は溥儀に忠誠を尽くし、戦後も東京裁判後に著書で“日本が溥儀を裏切った”と明言したのである。



今号は、5月に開催された講演会「エリートたちの北京～清代の日常風景～」の内容と満洲国に関する山田勝芳氏のご研究の一端を掲載いたしました。北京はかつて満洲の皇帝とそのエリート集団である八旗の居城であり、その最後の皇帝溥儀は、日本の傀儡国家満洲国の執政・皇帝となりました。「戦争」や「侵略」が話題にのぼることの多い我が国の夏ですが、現地社会の長い歴史の流れにも思いをいたしたいものです。(岡 洋樹)

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第66号 2015年10月10日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学東北アジア研究センター一気付

PHONE: (022)795-7580 FAX: (022)795-7580

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp